

A través de mis pequeños ojos

タイトル	僕の小さな目で A través de mis pequeños ojos
著者	エミリオ・オルティス Emilio Ortiz
出版社	アントニオ・バリャルディ (ドゥオモ) Antonio Vallardi Editore (Duomo ediciones)
出版年	2016
ページ数	256
読者対象	一般
レポート作成	長神未央子

概要

SNSで話題になりベストセラーになった小説。事実に基づくストーリーが読者を魅了する。盲導犬の目を通して語られた友情と恋愛、さらに困難に対する克服のゆかいな物語。クロスは陽気でやんちゃな盲導犬。マリオは人生の道を切り開こうとしている目の不自由な若者。ひとりと1匹は強い絆で結ばれたチームだ。本書『僕の小さな目で』は、クロスを通して人間世界で引き起こされる出来事を語った軽快で感動的な小説だ。作者のオルティスもクロスと同じくらいやんちゃなスポックと言う盲導犬を持ち、本作で自身がよく知る現実を語っている。

主な登場人物

クロス (僕) : 本書の主人公。オスのゴールデンレトリバーの盲導犬。
マリオ : クロスのパートナー。目の見えないスペイン人学生。
ジェレミー : ベテランの盲導犬訓練士。
ニコ : マリオの友人でよき理解者。
サンドラ : マリオの幼馴染で元恋人。
マリア : 心理カウンセラー。マリオと出会い、後に結婚。
トニ : マリオとマリアの息子。クロスと仲良し。

あらすじ・内容

盲導犬訓練士のジェレミーに連れられて犬舎を出たオスのゴールデンレトリバーのクロスは盲導犬訓練センターでマリオと出会う。マリオは背の高い青年で、クロスに知らない言葉を話し、遠い国のビスケットの匂いがした。その日からクロスとマリオは同じ部屋で寝起きし、盲導犬とそのパートナーとしての訓練を受けることになる。マリオを含めた6人のスペイン人視覚障害者はアメリカの訓練センターで盲導犬と生活を共にしながら通訳を介して訓練を受けていた。クロスは、路上訓練で散歩中の犬のところへ行ってしまうたり、ショッピングセンターで脱走を試みたりとやんちゃぶりを発揮するが、次第にマリオとの信頼関係が芽生えていく。クロスとマリオは苦労しながらも無事最終試験をパスする。マリオがクロスを連れてスペインへ戻る前夜、ジェレミーや仲間の犬との別れが近づいていることに気づき悲しむクロスに、マリオは「サンチョ・パンサとドン・キホーテのように一緒にたくさんの冒険をしよう」と言う。

ジェレミーと別れた一行はスペイン、マドリードへ。初めての飛行機に緊張するクロス。空港でマリオとクロスはマリオの両親、友人のニコや恋人のサンドラに出迎えられる。翌日マリオはクロスとマリオを連れて近所を散歩する。アメリカとは違ったマドリードの雰囲気は驚くクロス。ある朝早くマリオとクロスは地下鉄に乗ってマリオの大学へ行く。大学のカフェテリアでマリオが朝食を取っているとクロワッサンを持った女性が近くを通りかかり、クロスは彼女のクロワッサンを横取りして食べてしまう。彼女に謝りクロワッサンを弁償すると言うマリオ。気にしないでと言う彼女だったが、結局ふたりと1匹で朝食を取る。彼女はマリアといい、この大学の卒業生で現在は心理カウンセラーとして働いていた。

マリオの大学の卒業式の日、マリオが家族や友人と出かけてしまったので、家で留守番するクロスは淋しさのあまり現実と思い出の入り混じった夢を見る。自分で事業を立ち上げようとするマリオにサンドラは、なぜ両親に援助を頼まないのかと尋ねる。マリオは、周囲が助けてくれるのはありがたいが障害があるからといって自分のできることまで助けてもらう必要はない、援助を受けるかどうかは自分で決めると言う。ニコはバーで酔った拍子に、長年マリオと付き合っているサンドラが一向にマリオを彼女の両親に紹介しないことを非難する。マリオはニコと口論になるが、サンドラとうまくいっていないことに自分でも気がついていて、マリオはサンドラに招かれて初めてサンドラの家で彼女の両親と食事をしたが、サンドラの両親にあまり歓迎されていないようだった。会食後、マリオとサンドラは互いに距離を置くことにする。

マリオは銀行に融資の依頼に行く。銀行の担当者はマリオのIT関連の事業計画に興味を示したが、次の週、障害がビジネスに支障をきたすことを懸念して融資を断ってくる。ショックを受けたマリオだったが銀行を出たところで偶然マリアと再会する。二人は好きな音楽や本の話で意気投合する。後日マリアは、彼女がカウンセリングに使っている事務所にある空き部屋をマリオの事務所として使ったらどうかと提案する。マリオは驚きつつもその提案を歓迎し、そこで事務所を開く。事業を立ち上げた当初はマリオの目が見えないことを不安視するクライアントもい

だが、やがて大企業のクライアントがつき、事業は徐々に軌道に乗っていった。やがてマリオはマリアと結婚し、トニという男の子が生まれる。クロスとトニはとても仲がよかった。年月が過ぎ、年を取ったクロスはミスをするが増えてきた。初めての場所へ行った時は特にひどく、クロスが階段に気付かなかったためマリオが階段から落ちそうになったこともあった。盲導犬の仕事に誇りを持っていたクロスは自分が若いころのように仕事ができなくなってきたことを辛く思っていた。雷雨の日、雷の音に驚き身を隠そうとトイレに入ったクロスは便器の中に落ちてしまった。マリオはクロスの引退を真剣に考える時が来たことを悟る。自分たちがクロスの面倒をみると申し出るマリオの両親。マリオは嬉しく思うものの、クロスの力が強いので両親が怪我する恐れがあることから返事を保留する。マリオとアメリカの訓練センターで共に過ごした5人の仲間がそれぞれの盲導犬を連れてマドリードのレストランに集まると、パートナー犬が亡くなった仲間もいた。楽しい時間を過ごしたが帰り道でクロスはそそくをしてしまい、クロスは自分が年を取ってしまったことを悲しく思った。クロスが引き取られることが決まり、トニはマリオにクロスはどこへ行くのか、もう会えないのかと何度も尋ねる。マリオは「サンチョ・パンサとドン・キホーテのようにたくさん冒険したね」とこれまでの思い出とクロスへの感謝を手紙に記す。クロスがマリオの家を去る日、自分の状況を理解したクロスはマリオの選択を静かに受け入れていた。マリオは自分でクロスを引き渡せそうにないことからマリアに後を託す。マリアは引退した盲導犬の世話をする若い女性にクロスを引き渡す。トニはクロスに手紙を書き、自分が大人になったら必ず迎えに行く約束する。すべての気力を失ってしまったクロス。しかしある朝扉が開き、遠い国のビスケットの匂いにクロスは振り返る。マリオたちが迎えに来たのだ。

所感・評価

盲導犬をテーマとした書籍は、「盲導犬クイールの一生」(石黒謙吾/文藝春秋)や「ベルナのしっぽ」(郡司ななえ/イースト・プレス)といった映画化もされたベストセラーをはじめとしてこれまで数多く出版されており、人々の関心を集めてきた。一方で、日本で活躍する盲導犬は2016年現在で1000頭にも満たず、一般の人が盲導犬のリアルな姿を目にする機会は非常に少ないのが現状である。

本書は盲導犬の一人称という非常にユニークなスタイルで語られる物語である。盲導犬が主人公であることから、低い視点からの情景や匂いや触覚といったものが丹念に描かれており、物語にリアリティーを与えている。人間のことを「二本足の生物」、「ヒト型生物」と呼ぶユーモラスな語り口で、隙を見ては脱走しようとしたり他人の食べ物を取ってしまうという一般的な盲導犬のイメージとはかけ離れた主人公のやんちゃさが魅力的である。そしてそんなやんちゃな主人公であるだけに、老年期にさしかかった部分での哀切さがいっそう胸に迫る。本書の冒頭部分を効果的に用いたラストは美しい余韻を残し、温かな感動を呼び起こす。

著者のエミリオ・オルティスは1974年生まれで、自身も視覚障害を持つ盲導犬ユーザーである。マリオが経験する様々な出来事は著者自身の経験に裏打ちされており、IT機器を使いこなすマリオの姿は新しい視覚障害者像を示している。また、物語の中で盲導犬についての説明や一般の人が盲導犬と接する時の注意点などが自然な形で取り上げられており、盲導犬についての理解が深まる内容にもなっている。

試訳

(第2章p40 22行目より)

僕たちはショッピングセンターの中にあるカフェテリアで休憩を取った。主人たちは会話に夢中になっているようだった。カフェテリアの真ん中には通路があり、二本足の生物でごった返していた。人間たちはそこで何かを手に入れ、袋を持って足を止めることなくどンドン歩いていく。男も女もいろいろな年齢の人がいた。

子どももたくさんいた。子どもは遊び相手にぴったりで、僕は子どもとすぐに仲良しになれる。子どもと遊ぶのはわくわくする。

マリオは木の椅子に座り僕的首輪の鎖部分をお尻の下に敷いた。僕がどこかへ行かないようにしたい時にマリオはいつもこうする。ここにいるみんなと歩きまわったり、みんなが持っている物で遊んだり、いくつも並ぶ棚の中にあるおいしそうな食べ物を食べたりすることができないなんて。僕はくんと声を上げた。

僕はリードをくぐりか八かの賭けに出た。首輪を強く引っ張ると、鎖は椅子の上で押さえているマリオの体重をもともせずにすっと抜けた。たくさんの友達とおもちゃとおいしい食べ物が待ち受けているまっただ中へ!

ハーネスを付け、首輪の鎖を引きずりながら僕は通路へ飛び込んだ。

まず12歳くらいの男の子に挨拶しに行った。その子が僕の頭と首筋をなでてくれたので僕は彼に飛びついた。その子の顔中をぺるぺるなめ、その子がけらけらと笑い声を立てると僕は嬉しくてたまらなくなった。

次に別の4歳くらいの男の子の方へ向かった。その子はユーモアのセンスをかけらも持ち合わせておらず、僕の顔を見るなり泣き出し、まるで腕でも噛まれたかのように大声でわめき始めた。でも僕はなだめようなんて少しも思わなかった。こういうことは時が解決してくれるものだから。

僕の数メートル先に、片手にプラスチックのコップ、もう片方の手にケーキを持った男の人がやってくるのが見えた。あの人に挨拶をしてケーキを分けてもらおう。僕はすぐに彼の方に向かって通路を歩いていった。

突然僕の首は強い力で引っ張られた。4本の足に急ブレーキがかかり、ショッピングセンターのつるつるした通路で転んでしまった。ふりむくと、もう一人の訓練士のマーガレットの顔が見えた。マーガレットはいつものような優しい顔をしておらず、僕は自分を転ばせたのは彼女だとわかった。

こうして僕の冒険は幕を閉じた。マーガレットは黙ってジェレミーに僕を引き渡し、ジェレミーはマリオに僕を引

き渡した。マリオは真剣な面持ちで立ち上がった。ジェレミーはマリオを叱り、マリオは僕を叱った。叱られた時にふさわしい態度として僕はしゅんとうなだれてみせたが、しばらくしてまたカフェテリアの床に伏せた時、短かったけれどスリリングな僕一人の大冒険を思い出してにんまりした。

ショッピングセンターでの脱走劇でアドレナリンがたくさん出たけれど、マリオに叱られたことで僕はマリオを裏切ってしまったように感じた。急に後悔の念が湧いてきて、体の奥深くからほうっと長いため息が漏れた。マリオは優しく許すように僕の首筋をなでたが、顔はジェレミーに見つからないようにそっぽを向いたままだった。マリオはどのタイミングで僕を許すべきか迷っているようだった。

Source URL: <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/traves-de-mis-pequenos-ojos>